れて居らず、一般的教養の書のみで、之を一轡して印度關係書と稱しても少しも差支へない程度のものであるからである。「印度洋問題」は「現代印度論」の姉妹篇とも言ふべきであらう。そして「現代印度論」と同じく印度洋關係書の先驅となつた。その内容は印度洋の大勢、濠洲の諸問題、東北印度洋の諸問題（蘭印、馬來、ビルマ）、印度の諸問題、印度洋島嶼の諸問題、西化印度洋の諸問題（エーデン、英領東アフリカ、モザムビイク）南阿の諸問題、印度洋に於ける英國の諸問題、印度洋の今後の各篇に分れる。そして之は印度洋をめぐる各地域の社會、經濟、政治情勢の概説であり、著者が元來英帝國研究家である故か、主として之等の諸地域のイギリスによつて支配されつゝあつた過去の狀態の解説に意をそゝぎ、イギリスの内海印度洋の姿を述べ盡して餘すところがない。最も私が期待したのは最後の印度洋の今後であるが之には僅か十一頁が當てられてゐるに過ぎず、それも問題の核心を突くことなくして、徒らに省みて他を言ふことの多いやうな氣持を懷かされたのは私だけであらうか。末尾は「印度洋と我が日本」なる一節であるが、之は單に印度洋大勢の變化を知らずして今後の印度洋を論ずる勿れとの忠告的文章が二頁を割いて述べられてあるのみで、甚だ讀者をして失望せしむる。要するにこの書は「印度洋問題」なる名を借りて、印度洋をめぐる國土と住民の解説を取扱つたものに過ぎず、甚だ問題性に乏しい。印度洋内及び周邊諸地域に於けるイギリス侵略の姿は之によつて充分知り得るし、濠洲蘭印、馬來、ビルマ、印度、東阿、南阿に就いて一册の書で短時間に知らうと思へば、之に勝る書はない。たゞアジア的印度洋の姿に就いて、今後の印度洋と日本との關係に就いて今少しく教示するところがあつたらと考へるのである。

大東亞戰爭は進行しつゝあり、戰果は印度洋にも及んだ。伊東氏の言を借りるならば、「西南太平洋と印度洋とを結ぶマラッカ海峽とスンダ海峽に於ける人爲的堰堤が、皇軍果敢の行動により全く取除けられ、今や南大洋は期せずして一體化しつゝある。」その一體化が如何なる指導方針の下に行はるべきかに就いては、更に明かにさるべきであらう。（大和書店刊、B6版、三七七頁、昭和十七年六月十五日發行、定價二・三〇）（淺井得一）

北極と南極

小牧實繁
川上喜代四著

（小牧實繁教授監修、世界地理政治大系第十五卷）

現在國民の關心が南方地域にのみ焦點づけられてゐる時、「世界地理政治大系」は「蘭領印度」、「印度支那」に引續き第三回の配本として突如「北極と南極」を吾々の前におくつた。此處に本大系の企畫の高き獨自なる指導性と此の「北極と南極」の意義の重要性の存することを吾々は先づ認識せねばならぬであらう。

まことに、嘗ては世界の見棄てられた邊隅としてのみ觀念せられ、現在なほ氷雪に鎖された輕卒にも信ぜられ勝ちな此の兩極地方が、新しき世界政治の上に如何に重要なる意義を有するか、

又此の地域が如何に深くアジアと連繫するか、更には當面の問題たる大東亞圏の建設に此の地域の關聯することの如何に大なるものがあるか、讀者は餘りにも舊來の觀念に超絶したる大いなる意義を此の地域が有することを本書のうちに了得するであらう。

北極地方に就いて云へば、遠く十六世紀の頃より今日に至る迄多くの犧牲と艱苦を重ねつゝ行はれきたつたヨーロッパ人による極北の探檢が、決して單なるスポーツ的競走や盲目的な知識的慾求にのみ出でたものでなく、寫極に於いてそれは彼等の東洋に對する憧憬に由來するものであり、東亞に至る交通路の啓開への努力にあつたことは本書第一章極地探檢史の項に明確に叙述せられてあるところである。即ち絹の道や香料の道とは何等本質的に異ならない意義と價値を有してきたのが此の氷の道であつた。然しながら言ふ迄もなく北洋の自然は久しく彼等の企圖の實現を阻んできた。だが今日に於いては少くともシベリア沿岸ではそれは殆んど實用の域に達してゐる。吾々は特にソ聯が革命後今日に至る迄、異常な迄の努力と熱意をもつて此の北洋航路の實用化に意を注いできた詳細を知るであらう。此の航路開拓の成功の曉にはソ聯海軍は再び日本海に於ける失敗を繰り返へさないであらうと述べたスターリンの演說が此の地の重大性を端的に物語る。更に航空機の發場が將來に於ける此の道の價値を比類なきものとした。北半球に偏在する世界の重要都市の航空連絡のために、北極經由の大圏空路はその最短路を提供するからである。吾々はソ米を連絡するスターリン空路の開拓が既に數年前に成功裡になされたことを忘れてはならない。

ラッツエルの見落してゐたもう一つの地中海——北極洋はこのやうにして新らしい意義を帶びて吾々の前に開けてゐることを本書ははつきりと教示してくれるのである。

又北極に比しては吾々の關心が幾分高くないとはいへ、既に廣大なる大陸の存在を確認せられた南極は全く將來の大陸として認識される。既に現在高度に利用せられつゝある多量の鯨群資源をはじめとし、潛在的な可能性を包藏する地下資源等も認識せられなければならないが、更には此の地域も亦將來の交通路としての價値を持つ點に注意されなければならない。そして此の地域の探檢には北極に於けるソ聯に對比し、アメリカが驚くべき執拗な努力を傾到し來り、バードが第三次の探檢にあたり、此の地をアメリカと濠洲及びアジアを結ぶ航空路の仲繼地とする意向を聲明したことは大いに注目されねばならない點である。まことに極地の氷の道も南海の香料の道もつまりはたゞ一つのものに結ばれ、世界の各地域はたゞその全體的な關聯に於いてのみ正しく把握せらるべきことを本書は明白に教へ示してゐるのである。そして又最後に極地の領有問題として、一見精緻な考證と論理とをもつて展開されてゐるかの如き扇形理論を詳細に紹介されつゝ、本來それは極地に面する强國の現實的利益を守るに最も都合よき合理主義の假面の下に恣意專横な分割を意圖する以外の何ものでもないことを明快に摘發して、此の極地も亦皇道の光被によつて道義的秩序の下に世界に向つて開かれねばならないことが說かれてゐる點

を特に留意せられなければならない。

従來、極地に關する文獻は――邦書たると洋書たるとを問はず――その殆んど悉くが單なる探檢記であり、極地自然の說明であり乃至は自國領土を正當化せんとする領有問題に關するものに過ぎなかつた。本書こそは此等舊來の類書とは全くその由來と趣を異にする。人はあらためて本書により極地そのものの認識を新にするであらうし、又斯くも明快適確なる日本地政學の展開に驚異の眼をみはらずにはおられないであらう。皇道世界維新實現に當り日本國民すべての精讀を庶希したき著書である。（寫眞地圖豐富、A五版一八一頁、白揚社刊、定價貳圓）（藤野森明）

美術樣式論

リーグル著・長廣敏雄譯

先づ何よりも菊版五〇〇頁の大譯を完成された譯者に敬意を表したい。何となれば、「手頃」であることが、內容においても定價においても第一の標準であるらしい出版界にあつて、本屋の注文によらず孜々として、しかもこの「名著」を譯することはさう容易なことではないから。名著を譯してこそ學界に寄與するのである。リーグルの名を云云すれども、それを通讀せる人は幾人あるかと思へる程に多忙らしい學界にあつて、名著を通讀する事はこの譯書によつて甚だ容易になつた。原本はやゝ古いとしても、それは新しい手頃な書よりも遙かに生命があるし、また何よりも學者の態度を教へてくれやう。

それならば何故に名著であるか。それは學術の發展に記念碑的な業績となれるものであつて、この場合にはセンペル、グッドイーヤー、フルトウエングラー、そしてリーグル、次いでラングロッツ、ブショウと美術考古學の發展を劃するものであるからである。しかし更にこのリーグルの著そのものが如何なる意味において名著であるかについては、譯者が卷末に付してゐる「リーグルを讀みて」に盡きてゐるから、私は加ふべき何物もないのであるが、そしてまた許された所定の頁數內では不足であるが、彼リーグルの立場たる歷史的、發展的なそして「超個人的にして、時代と社會とを含む藝術意欲」（四七六頁）はここに明かであるし、またその「世界史的」な態度はこの裝飾文樣を取扱つても充分に、否專ら世界史的な立場から說かれてゐる。今や「世界史」は人々の關心事であるが、「世界史的」であることは歷史家考古學者にとつてより緊急なより根源的なものであると私は思ふが、それをばこの書は充分に教へてゐる。主として植物文樣就中唐草文樣についての叙述であるとても、以上の二つの點によつて如何にも生き〳〵と何人にも關心をそそる。

今更らに本書の內容を述べるのも恥しき次第ではあるが、紹介のために略述すれば、第一章幾何學的樣式の重心はこの樣式が織物起源でないこと、またそれが各地において發生せることを例證し、今日ではこの說は定說となつてゐる。第三章「植物文樣の始源と唐草文樣の發展」は半以上を占め、その內でも「ギリシア